文久元酉十月

へ13
3974
2

門 ベ13
號 3974
巻 2

本朝一大奇書

英傑續三國誌傳 第二集

智不足齋梓

六十餘劔八象の松ハ象に乗て卦ハ美髯公ハ
そ〻ちの天ハ六星をいり地ハ六ようをあるを
ゆゑび画ハ六法を彩り武備ハ六御府の大和式
佩き大将ハ六翼大六翼を拾ハ軍師ハ六韜六記
の備を周ハ六弧ハ源家の棟梁六法ハ武人
の壮士六芸の賢士を世ハ世ハ歌ハ六画
うるひ耳ハ六律を奏し六家のむすめ
六朝のかゝうをつゞれり六朝ハ和ろ

驕者不長守
忍雪會誓恥

みくに人の家をとうんぶ人情よく納つく人根
清淨なるゆゑよ人いく世人の世界世界世界と
ちりこいぬもの摩訶河の般若さとりて人親ふ
よ幸ひを降伏誠よ人の土教くるたちやこの
和漢三國志を師資の法恵よりの
あとと日本ふるくの三國合をて人編目くと
なりさづるまちまん

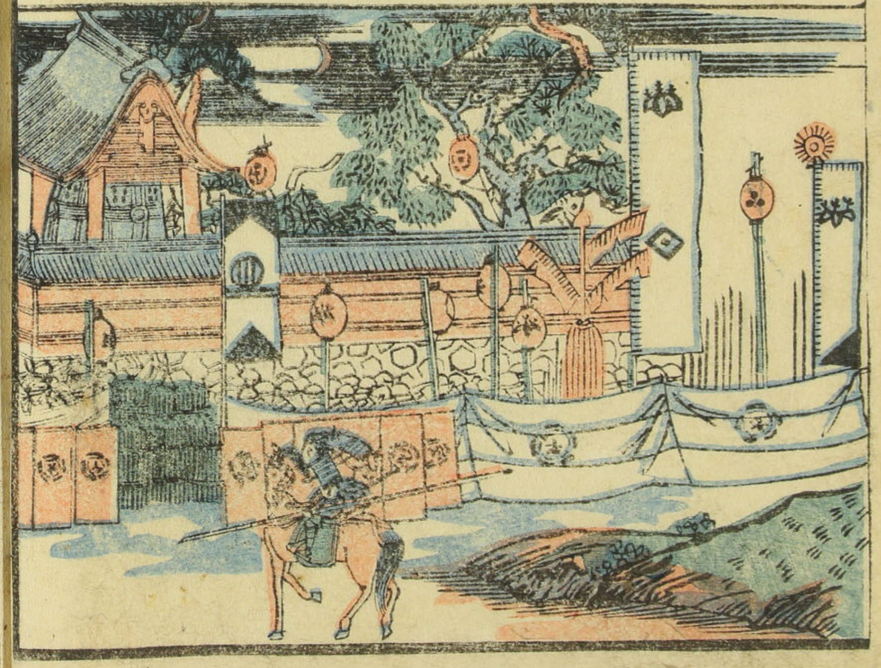
南嘉四人 述

浅井備前守長政
大織冠鎌足公の後裔にして江州
京極の臣下なりしが父久政とたゝ
江州を輝し智勇兼備の良
将なり織田信長義昭公を補佐し
て上洛の志ありしより江州の
諸大名と和順せざれば上洛の道筋
難義なるべしと妹於市の方を以て
長政に嫁せしむ此於市の方は
春秋廿二歳その容貌を扱ふべ
楊柳の風に靡くが如く顔色の艶ふ

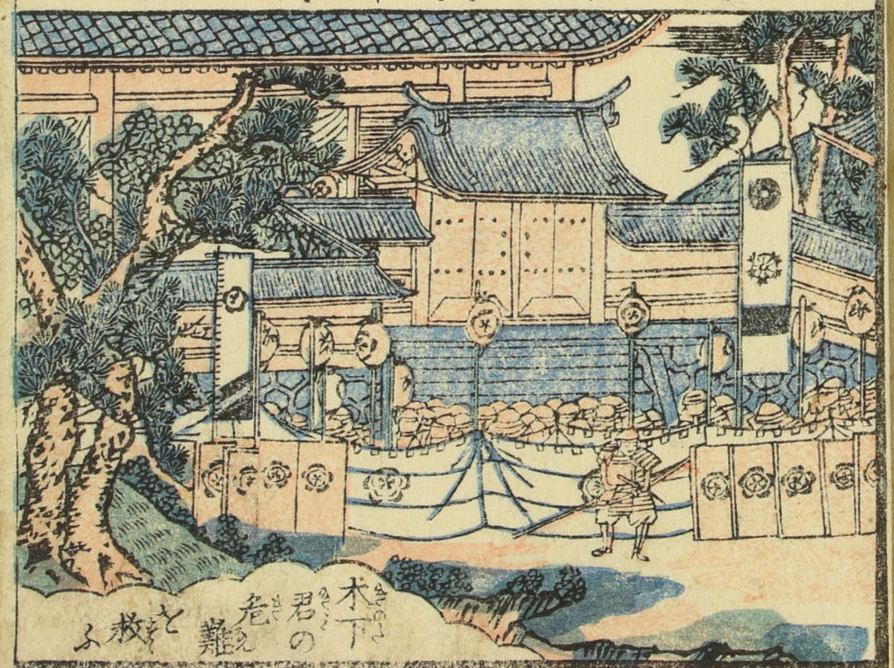
羅きく八美容の面ふいくもむも云つべし
東西無双の美人まして和哥よ巧よ
絲竹ハ妙音ハ長政ガ子孫ニ限り
たく僧尼の契細うもり愛ふおいて
織田浅井あるハ秋を唱へ万歳を
呼び伸ふ大業を起さべしと辰歯
の國と成ア苦ふ将軍ハ家を環位ハ
さしめそう後織田信長将軍家ハ
命と号し浅倉義景を討の附ふ
織田と国を断義景ハ与し信長の
帰路をたつ信長間道を經て岐阜ハ

帰る後姉川ふて大戦をしげ敗して
後屡利あるも終ハ小谷の城ふて自
害ス是を呂布ハ比ス
遠藤喜右衛門春ハ
浅井家の功臣智恵人ハ勇武元
ハ秀ふる剛士ふり信長ハ忠臣と
佐和山ふく始ふ對面の附つ信長
の言語容貌を考へるハ終ハ天下を
平呑ふべき猛威奮発ふして家ふ
ハ長政父子ハ背ふく信長を殺
さんと計るふいでも勇ひざるハ忠ふて

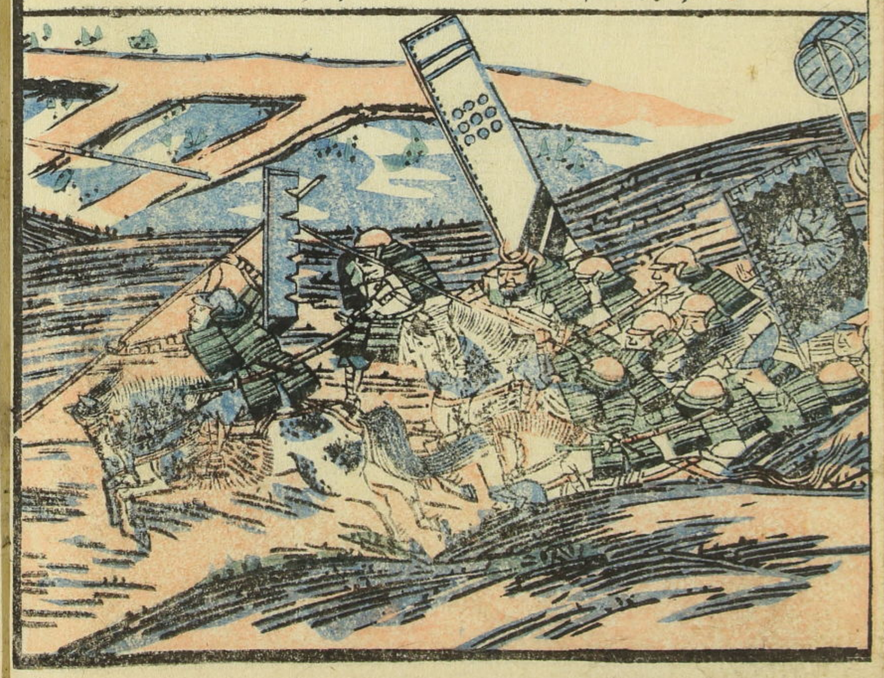
べきかゝるゆゑ上ハ信長ゞ旅館菩
提院ゝ押寄討ゑ上ハ主人の怒を
受切腹ハ是ハ國家のためなるべし
猶ゝ浅井拝殿と申人百
五百人の追手いと卒ゝ菩提院へと
ゝ寄そう本ト為是をもとう
奇計をめぐらし二千余人の勢を集
め旅館をかゝめられバ遠巻ゝ討ハ
面倒とぞ思ふる其後織田の
勢強大なるゝ時信長をもひた
朝倉ゝ合体せんと也故云ゝバ



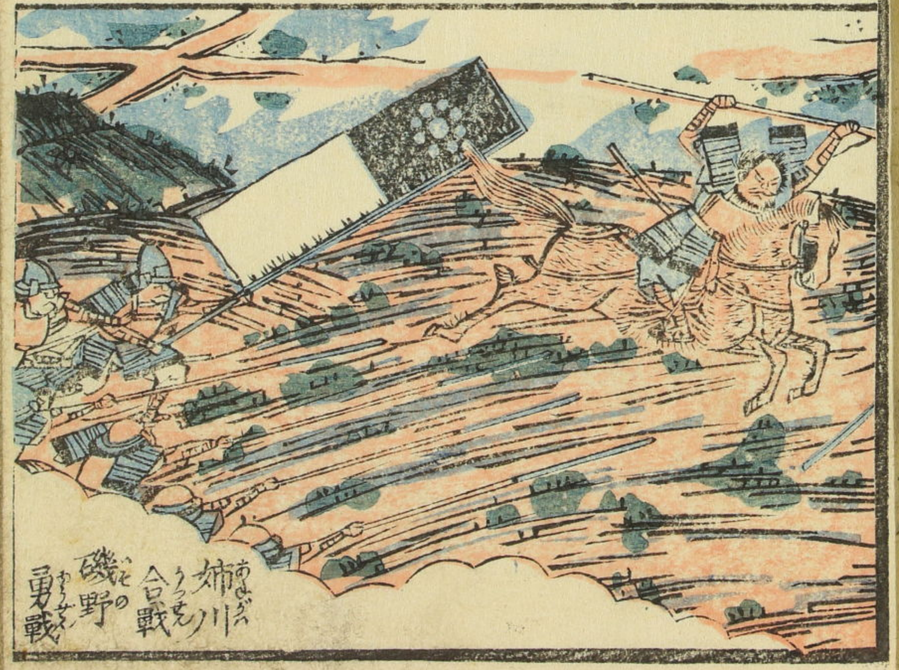
幸石を傳ゝ中るハ先年伊和山
まで討ゝ入せゝ時洗足ひゝく今
信長の威勢盛なるゝ時ハ敵対ハ洗
足ひゝくゝいまでも織田家ゝ
ゝ結び大業をなすべしと
も長政ひゝて終ハ義家ハ一味に
春元今入洗井家の滅亡遠ゝまで
と姉川の一戦ハ織田の軍陣ハまき
まで入信長を深ゝ討入ゝ仕中
久作ゝ家ゝされ終ハ仕ハ
まゝ魏の程昱ゝ



磯野丹波守員昌
江州佐和山の城主三田村表姉川の
合戦小浅井方の先陣の大将なり勇
猛無双の強兵なるゆへ附たるゝ士卒
悉く勝ときゝて兵ゆく其勢猛
虎のごとく員満なるゆへ織田勢の
段々ふ備へ崩るゝを見て法せを向ひ
此敵を破るゝハ長蛇の備へ一騎
よ突入るゝ左右をかけ廻り正
面を切崩し信長の旗本まで押詰
勝負を一挙ふ決せんと自身



さい先よ馬をはやめふ勇ましさんぐ
押寄まゝ織田の先陣坂井右近二千
余人ちりぢりに繰なしゝ後矢ばよ
近寄なまゝ先備へる後鉄砲をうつべ
きの坂方五ふ鎗を合せ喰ひ
相戦ふ敵味ふ時分ハ方ふ備へ
ぶ一鉄砲と面ゝ切かゝれバ
坂井の兵士面をかゝべ
漂ふ所をさらや勇戦今ちりぢ發
をうつ立てどろと喰て突立まで
坂井さんぐよ破まくく散乱を二陣の



姉川合戦の磯野勇戦

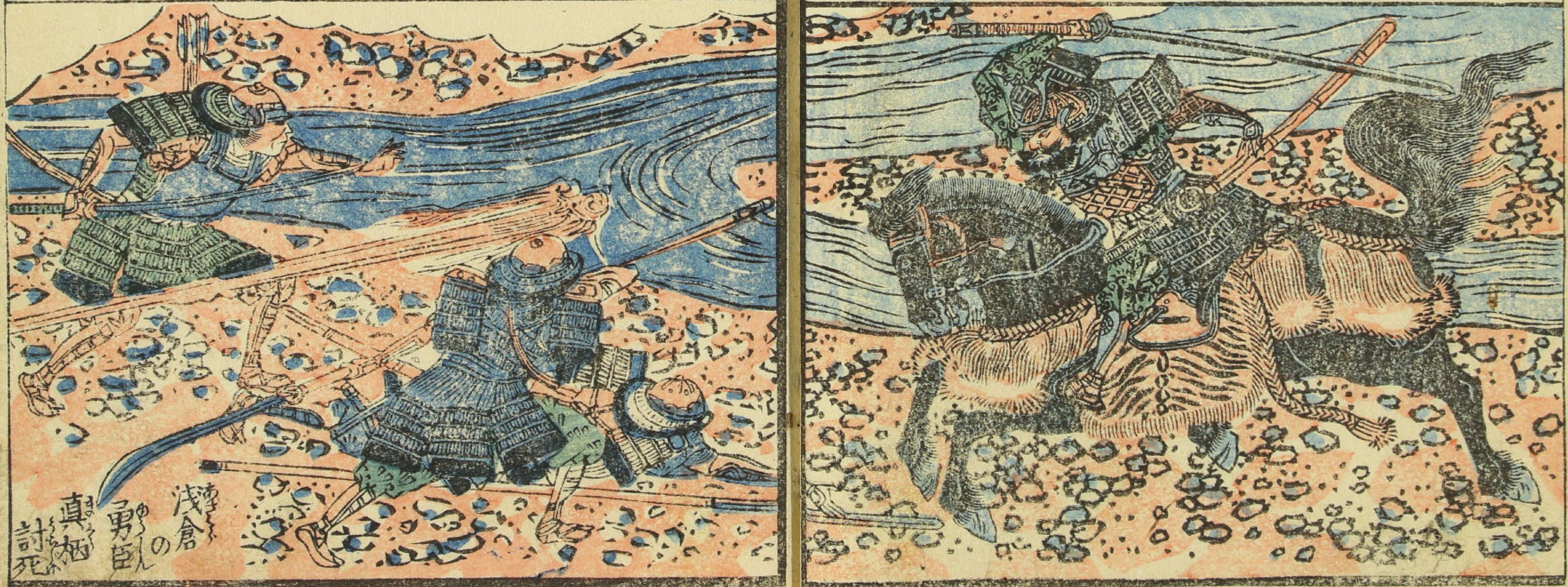
池田勢力二手家人坂井弓代て徐々を八
ツを後野ゝ勢面もあゝ武池田ゞ陣
切入薙立るその勢しきるの雷光の如
池田もあゝひらめ左右へどつゝ取
あゝ雷侍ゝ名五八摩訶ゞ勢の中
へ走りもたゝらず徐々を拔く乱一
番ゝ突立ゝ乱も左右へ引あげ
ゝ軍ゝ佐久間右衛門徒を繰出
ゝ自ゝ陣ゝ引ゝ味方を
下知して義ゝ破ゝ勝ゝ
ゝ彼竹の勢ゝ軍扇を開ゝ左右

姉川合戰
木村又藏
勇力之圖

を切鉾先すゝどゝ突ゝまゝバ
佐久間ハ備を乱さゝと自分徐々を
ゝく敵ゝあゝ忽ゝ陣突伏ゝ
ゝ突満悟き敵の振舞ゝ
ゝ突ゝと馬を駆ゝ
突ゝまゝバ佐久間物ゝの怒を
髭髯逆ゝ立勇を振ゝ戦ゝ
さゝ双方ゝ進ゝ猛ゝまゝバ
軍ゝ勝負ゝ見物して勝負を
烈ゝ戦ゝまゝバ磯野ゝ後ゝ
ゝ大ゝ大和ゝ赤田信濃守山

爰に源太左衛門ハ味方を討れし無念さに續
やと一度にどつと突かゝれバ佐久間が
軍勢手主を討れしと鬨の聲を鳴させ
るんで切結ぶ信盛勇なりといへども
此大敵を遠ざかしく破れ立なんとん
たまれバ戦をさ次の備へ譲りて左右へ
おつと引退けり五番備森三左衛門
佐久間に代つて槍を合すると磯野
が勢力ハ勝に乗りける鋒先あたりがたき
くらんにおもひ可成大手にいつち此陣
を破らせまさバ大将の旗本あやうく候へと

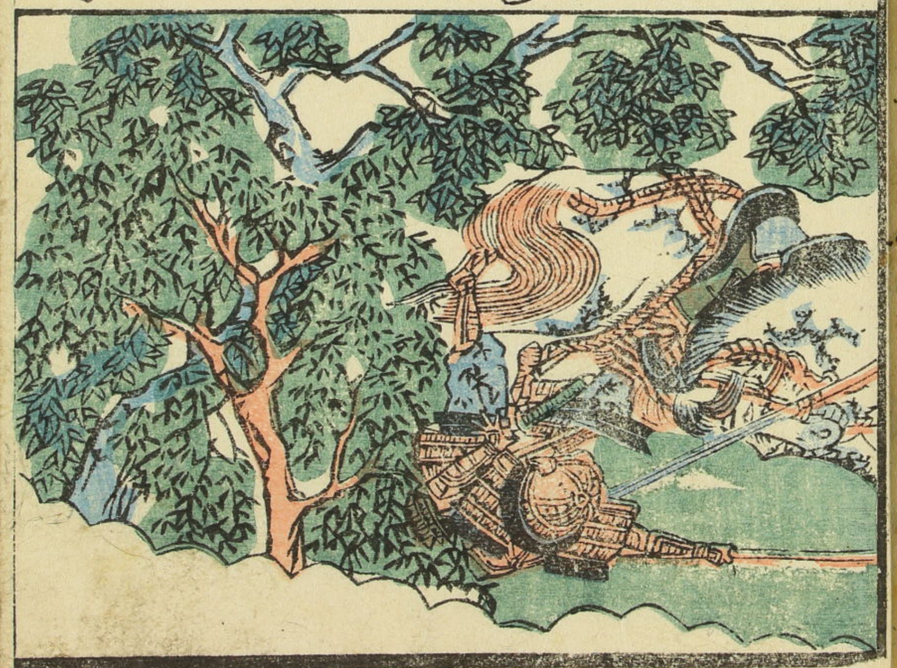
破られ何面目に活て人に面を合
さん討死せよ人々とてて自ら真先に
槍を合せ一足も引じと戦ふたり
是時木下藤吉より軍使を立すみやく
引へ退べしとや返りのまゝバ森が
勢隊をもて左の退けバ磯野が総織
田の勢を悉く破り今ハ旗本の一
備のみになりしバ権ろ色を勇ます
らん時丹羽守早とこや味方と、か
へりそてやれるハ心得ありと此敵と
て旗本の先勢あせバ大勢にて堅固



小備ふべきふかい勢ひてさても隊伍と
の仕方は奇計をかゝ味方を討んも
怪ありべし其上新参のものを下立てる
ハ織田家の諸士本下ありとかゝ稼
してきゝみ浮せて孔明街亭を破られ
馬謖を斬て仲達を去しめしハ
孔明が才智仲達が上をまりて仲達
が才を使て仲達を去しめ
碎雲丹波守我思慮ふまよい今まで
勝〻る軍勇氣ふみ給ふ本下が
為ふ破らるゝ呉の鍾離牧ふ撃ふ

松下之綱伊藤を討圖

松下嘉兵衛尉之綱
今川義元ふ仕へ千ふ百貫を領せ
武術兵学の奥義を悟り今川一家
の武士ふ師ふて其名頗る鄰国に
震ふ秀吉も未本下為吉郎ふ
仕へ武術兵法の奥義を
傳ふ今川ふ仕へ北条氏政と富士
川ふて合戦の時本下為吉郎初
陣ふて紀伊を拠せんと図ひしふ
北条氏先陣の大将伊豆日向守
只人ハ馬を立て味方の人を



たちまちうちまろび木下兵をゑて発砲
ごとく人なれと一さんに地をはり日向ちぶ
平ふ子の大腹をさくり子突通せば
馬ハ驚きたちまあがる日向ちもなま
つかれどとくと落るを若君ハ
と走あがる踏付く槍の透間を二刀
さし抑へく首を打落さかくるやの
伊達ぶ勢に同苗強作と云る大剛の
勇士叔父ぶ付てうちを若君
帰ふ敵の大将を討ん と云人
今川の知られる切入り松下加藤

不破金森等野中
秀吉
敵を討る図

かくてうちうちを和して引退
鎗を捨つく突うちを添作八宝院
院の鍵槍は名人松下と後を合せ
は時千我ひとるぶ松下槍の柄を
縫ふ敵ふ既ふ馬より
落んとす本ト若君ぶ来り後の
柄の中より丁と切ぶ添作馬
ぶ落る和を之落すぶ馬よ
ぶ飛下り和ふ首をぶ切る益
州の張松ふ比さて
金森出雲守長近

始五郎八は毎回勝家ぶら旅下る随へ
武功抜群なり信長公御生害の後
柴田勝家秀吉と不和なりしふ
れ共信長公の遺言深くして人馬の往来
自由なりされば雪の消るを待徳川
一益とともゝみ付ゆるさんと前田不
破勢をもつて攻かゝる八我志を
改め秀吉と和睦し和共に加担を補
翼しなんと欲し汝不労を辞せば
上京して孟年心を秀吉ふ告和平
をゝ成ばゞ其ゞ雀躍何ゝ喜ん

柴田羽柴和睦の圖

此人こそ秀吉ゝ勝家が賠
地戦前線二ツの把逸亀二樽を贈
仰雪を踏こゝ風を凌ぎ都ゝ登り
秀吉と和睦を取結び小の左ゝ味
方ゝ後援が嶽の合戦ゝ於て秀吉
の陣ゝ馳参の事ゝ姉小路頼綱を
亡し一生涯を終る蜀の廖化ふ喩ふ
斎藤新次郎長龍
その父左兵太ち初義龍ゝ子ゝ
先年秀吉滅亡の時未幼稚なれば
彩未秀吉が家名を相続させんとて

信長能労り養育しめひろ小長
くふり〳〵忠義勇壮衆小部〳〵る武士
あり〳〵まさに中備後へ進せられ孫右衛
を第一に勤仕しる二条の城合戦の
時信忠公自成ふ手を下しまひ
敵兵拝余人薙刀ふて切落しはる
二ケ所ひ敵上へ引退き休息し
まひ〳〵は時も能敵ハ悪戦なり数
を付の数も〳〵で是を見て惟任方
の勇士永討ちんと〳〵る中中ふ
白糸まて威〳〵る浸を〳〵一十文字の

鎗を捨馬を躍らせ大音ふて勇く
家ハ忠義ハ彩ハ秋家利之ふり
軍ふ親隙の間ふ一族ふ〳〵一大刀
ふ〳〵せんとつふ忠郎大ふ怒り忠を
結する粉賊ふふする悪人一族とハ
織ちと槍を上〳〵く突来る双方手
強の勇士ふれバ怒く体度ふ〳〵
ア〳〵ふ〳〵ぐ長龍今ハ戦ひ勇れ利
之ぐ扨四太刀を交換ぐ終ふ討死て
魏の夏侯玄ふ
日幡太郎兵衛府

毛利家の勇将備中目幡の城主く
加賀の大将上原右馬左衛門祐ハ隆
景に味方して毛利家の閉ひ重
く倚頼の大将ありしが反心を発し
て高くの大将木村隼人を城中ゆ引入
城を日幡を焼炮まて打殺せり城
小獅子丸中の忠くも宮つへ張死
ろ手下の大将范疆よ比ゝて
桂民部小輔廣重
智勇兼備ゆして毛利家に股肱の
臣なり岡崎の城代なり〻此城に

東の丸に打まる石中鬱秀生口に爆き
服し浮田が勢をくに入鉄炮を打ろけ
間を作りく午九ゆ攻入んとひ屋を
早く推しく當を成爰を考途と
我ひ午九のゆくりり東の丸より
仮屋を因當し凄しく火矢を射出
しくりくゆ藁菅の仮屋なるば
火淵と燃付くり是を力なく士幸
二人さくくこと屋の上ゆ下り打消ん
しするゆを屋ゆまが二男孫太郎鉄
炮を以く二人ゆ打殺ど是ゆ恐

其二

きて重ねて火を結んとする者あり火炎中あり近く附煙りの四方へ掩ひかゝるとバ民家ハ焼せるあり打出よと城戸を開き五百餘人よりて敵勢をきんぐゝよ突崩ゝ呉朱榎の喩ふ

芳野

織田家の奥局を勤やうゝ容貌のくゝにくきゆ

西施小町も

才智まさる影ひなし

小姓頭上天武

とゝふ強勇の壮士あり上ゞ人右右ハ

あゝぶで愛着の情をゆんぐゝ芳野を恨ることゝ恋の山路ハ

なゝく命も今ハ絶ゆんと人傳ゆゝで

かゝるこゝ紀家の恋ゆまたまゝふ一夜ハ

手枕の情をゝきのゆも今ゆも昭

の日もゆきねをゝこちゝ人ねを恨ゝ

つゝ紀ゝひよ洗ゝゝゝ芳野も今

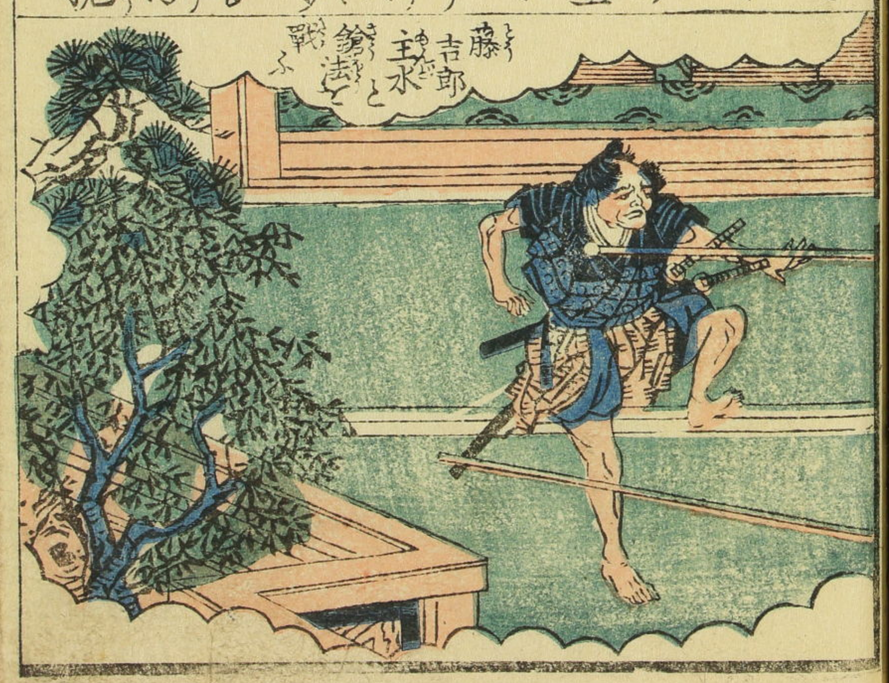
ハ心解　おゝまゝ人目をあゝびつゝ泣き笑

をゝこゝゆゝる山間ゝ行宿ゝ

茶道祐甫を以ゝゝの不義を許る

ゆゝ信長大ゆ怒りゝ大手代を加尚

ゝ永く暇を賜りゝゝ来色ゆ耽

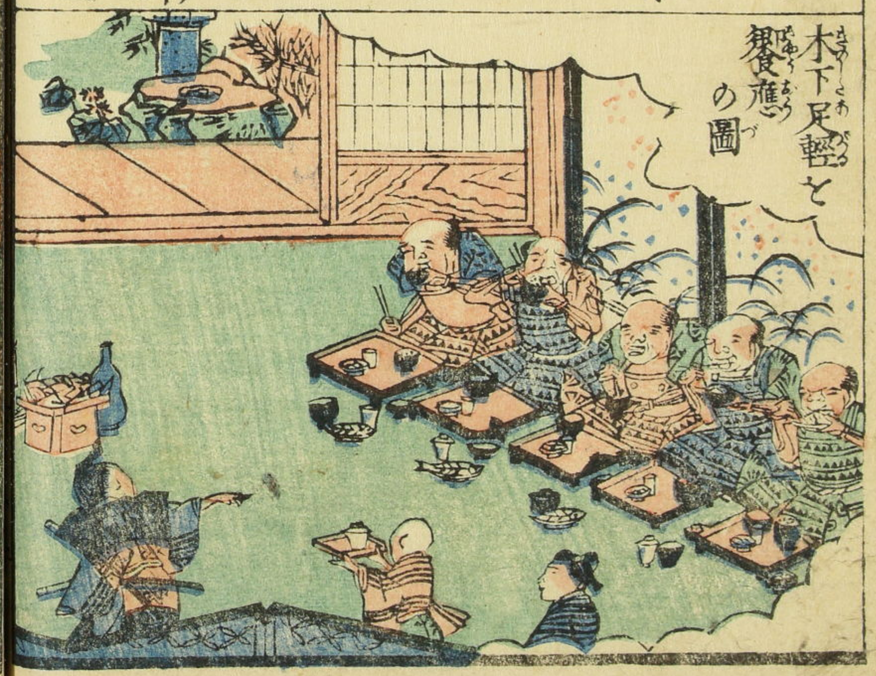


酒ホ乱ろく戯男ホあくぶれバ子脇す
まてぐ元甲山ホの御ろホ今川家大軍
を率ひて上洛あるとき織田の一家を討
伐のゝ甚ハえ隠ゐろうそまバ此時
命を捨て功を立ざんバ何の時をう
期はぐまてくをぐ本下若吉ぐをホ
まり今度の合戦ニ討死ゝ死後の
勘氣を免さまるバ何程ゐ嘆しう
人執成ひまるく涙を流し頼
くゝれバ若吉ハ是を許諾あけ
まバそまてう丸根の砦あいらう

上嶋鎗法調練の圖

主将佐久間大学を敵くゝまバ大
学もゐの節義を感ゝ共ホ敬の
るを待居ゐりかくるホ今川の大
軍責来りまバ元来必死の大武
只一騎ホ組出さんぐゝよ切立給津の砦
危くんゐまバ是を救んとい一文
字の小池ハ宮ホ早落賊
川勢勝誇ゐ大勢の中へ切入敵を撃
バ当ゐを本切ゐるニ今川方
松山外記といふ大男の長大代働
ホゐゝ給を振りて突ゐるを能

敵ごとに槍を合せて
了ふ突落し首を取て立上る
始と敵を討の麻のごとく甲を
十七度の此戦の後其功を賞し
氣を免さまし以ての
給仕にくりこの芳野を貂蟬
川尻肥前守鎮吉
始手柄と称し不当の男
中将信忠武田勝頼を討伐の時
体み進て伊奈城を落し其後信州
の佐久を降し戦功比類なし武田



木下足軽と饗應の圖

滅亡の後信長此度の忠勤を感せ
らるる一ケ国賜ふ錦の建威の軍
賈達の命よ
佐竹常陸助源義重
新羅源氏義光の後裔にて東の旧族
八家と称せられ其一族を称し
武勇誉世に称せ小田氏政と争
戦数度にして一度も敗なきを
関東に威を震ふ大関小田原の後
幕下に属せ司馬師に比して
大澤主水

鎗術をもつて立織田家に仕へ或時信長
侍士を召い給の柄はもつて短きと
何ぞ利ありやと問ふに主水進み
出短きをもつて利とす信長元
来も柄を好まざるゆへ諸士各その見
識をもつべしとおりやせられば木下藤吉
進み出茅ぶ存ずるはもつて槍の能と
して短きをもつて試よ後例不
知の足軽ふ命じ長を短を戦しめば
かるべしもつて方術べし芝別鎗の能
なり主水是をもつて木下と我

と足軽五千人を撰び三日の間槍術
を調練しそ場ゆく戦しむべしとて
五千人の足軽を撰び作槍を与へ朝
ようの暮ゆ五千で大汗をかいて苦
木下ハ拾名ハ負くなるべ三日の内
酒肴を無ひ英氣を養ひ三日目の
朝大沢木下足軽ハ連る陣の東西
ふ陣を布く信長始め佐久間桟敷ふ
出くとあるて相図の太鼓を打とひと
しく木下士卒ハ三ふ方ふ分ち同言
よ鯨波を発し勢ふ乗ふ出ふ

突くりる大沢の士卒これを辟易し
此比習ひ得し後の手段も出ハて
吉ゝ為めり半丁計退立くる
主水面目を失ひ藤吉と真剣の試
合を彩ふ信長假の試合まい剣を用
ゆくゝのたくれと八尺の弁鎗を安へ
勝負をあきゝむ木下ゞ天然不思
議の早業ゝ何で叶ふべきや終ゝ
突伏らまくゝ是よりゝ心を改め爰
吉ゝ組下とでゝ成る此主水之来
秋爰ゝの間者ゝゝゝゝ木下と試合

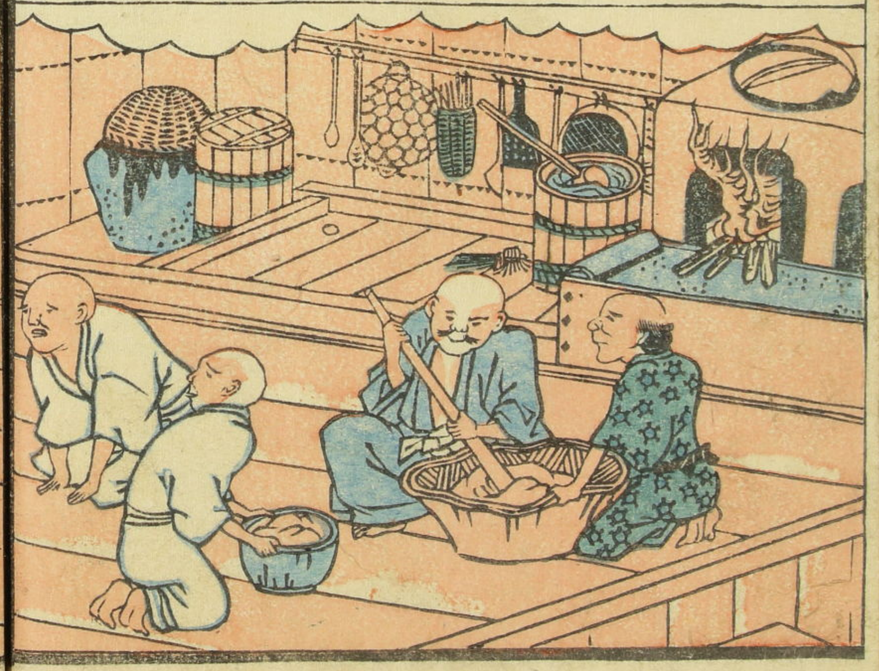
のくゝ紀眼くゝみゝ仕くゝで働ら
得ゝで是元人よゝゝゝゝゝ実ゝ帰伏
なくゝくゝ袁紹ゝ逢紀ゝ比ゝ
四王天但馬守政高
明智ゝ股肱の勇ゝ光秀ゝ計略よ
くゝて剛兵ハ七十余人を率くゝ中國よ
ゝ秀吉ゝ池田を討ゝんと百姓ゝ
出立尼ヶ崎ゝ居くゝ名将謀士と
いくゝも事閑忙ゝ附ゝ心危難を
生ずくゝとゝや秀吉ハ一刻も早くゝ信長
の吊合戦を営んと味方を離まくゝ只

一人此所まで来るを待まうけ
明智が剛兵四方より立囲み
さまを作り
ぞ近きて馬を突倒し生捕おせよと
て一同ひしめく此時秀吉
鎧踏だり後をかまへ三町計
加藤虎之介韋然天のごとく
徒く勢ひ逆ふ
をくれが南へ
軍不強うりん此所おの人あひよ
ばゝあまばかりと一あり喚くとうてしゞ

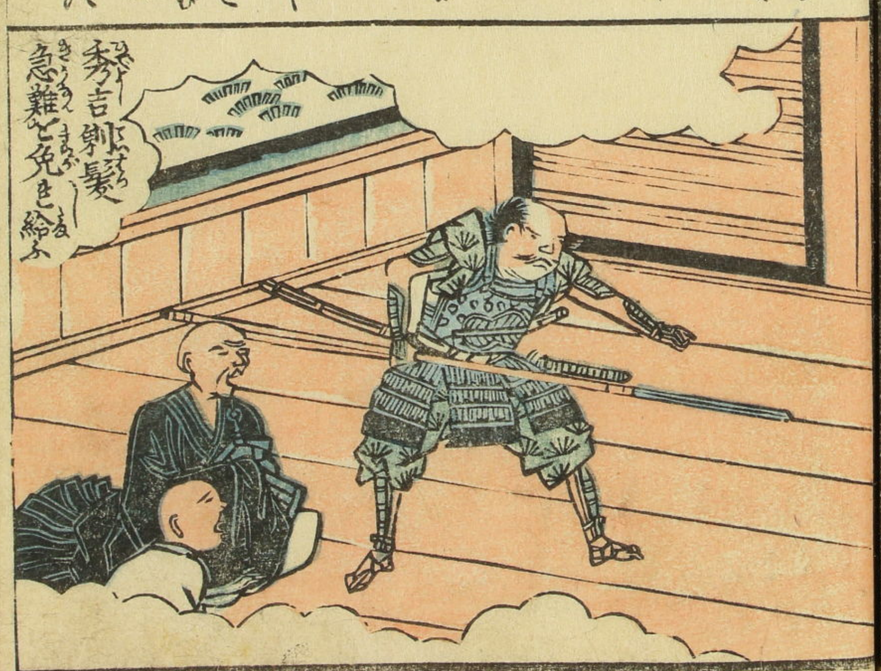
四王天但馬守の勇力の圖

一鞭くまして群がる兵士をなぎ
を一刎はねとばし
も乎おけとり四王天大音声
外へ行べき別まの命
寺尤右八深田後八川袋に入
ゆ
ど我退ひく生捕きてん寺
行ように徒く歩兵を防ぐべしと云
捨て逃出て秀吉ハ一さんに彼虎徳
へ近入門内より後をくれば四王天
飛ものごとく追来る即智の大将馬の
轡をとらへ

あるとき二刀斗切まゝば馬八弱き拵上り
彼細工を一文字よ紅くくり写さ天八
一筋さ切まゝ不隠られ大ち怒り身
を沈め蔓見ふ見ふ被ぎて被ぎて
深田の中へ走迄度徳寺へと逃さ行
秀吉八何方へ隠まんと思ひ
よち内せ〳〵考を思ひ隠もあ〳〵
ざまバ隣の栖受寺へ紅入傍を見
まふふよ浴室ふ僧ふ入湯してゐけ
まバ衣裳を棚の下へ投込丸裸ふ
風呂ふ飛入傍と共ふ湯浴〳〵ふど褌



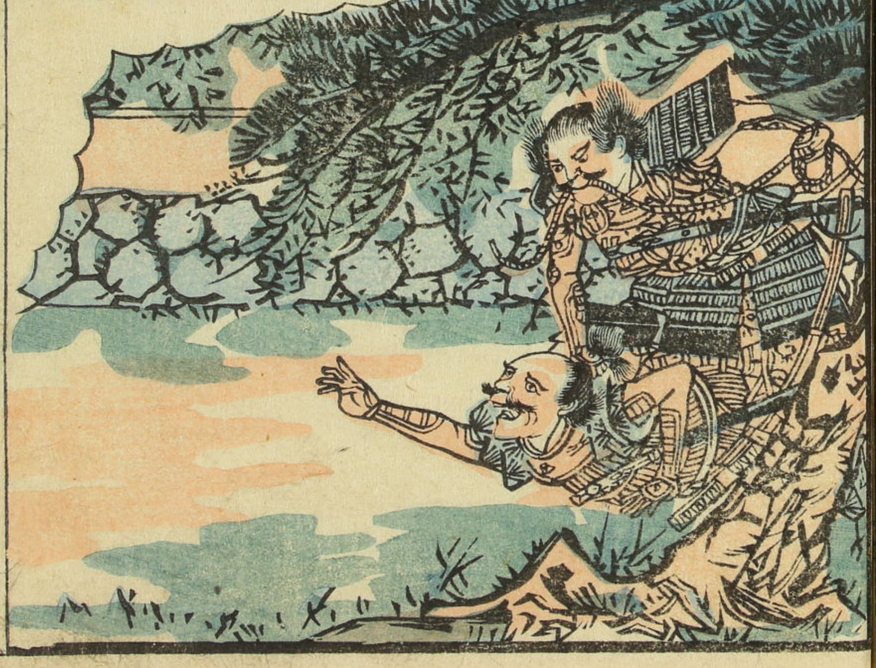
隠ふまバ扨よかゝ〳〵ふ雪水の傍ども
何ふ〳〵智ふ考もあ〳〵写さ天八度徳
寺へ逃来り剃髪ふ寺僧ふ向つく
今ふ寺へ羽柴筑前守を付ぬぞ
何方ふ隠〳〵や有の侍ふ〳〵
と眼ふ角立て〳〵ふで寺僧ふ大ち
恐れ左様の人曾く来らバ〳〵
寺中ふ捜〳〵ふと云ふ天云ふ
及ぶ退迄〳〵ふ遠ひ〳〵探如〳〵て
居〳〵て本堂客殿残り内く永
まで〳〵も不思議ふ〳〵秀吉所在さバ



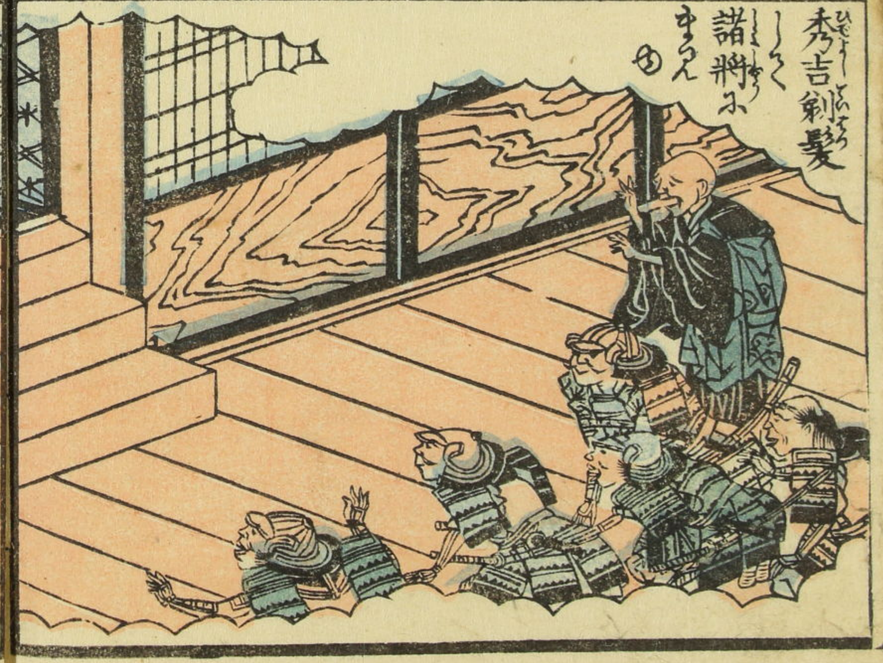
隣の寺へや通まろんとあつてじく
栖吳ちへ沈入く髮かく探求ま
ども更に有なの知さぐれバこハ心
得ぞ和ゐ逃でさひるゆく知あるまバ
飛く去べきやくもあ〳〵く夜叉の
〳〵ゆ〳〵ひて秀吉この栖吳ち
の風に隱まるゆふ思傷こと皆
湯より上り呉獨先より見付を
砥石利刀を柳より取ちゆ濡こる
髮を極ゆ剃落ひるを知る
者さくふたりを脫すてありし

清正四王天を討圖

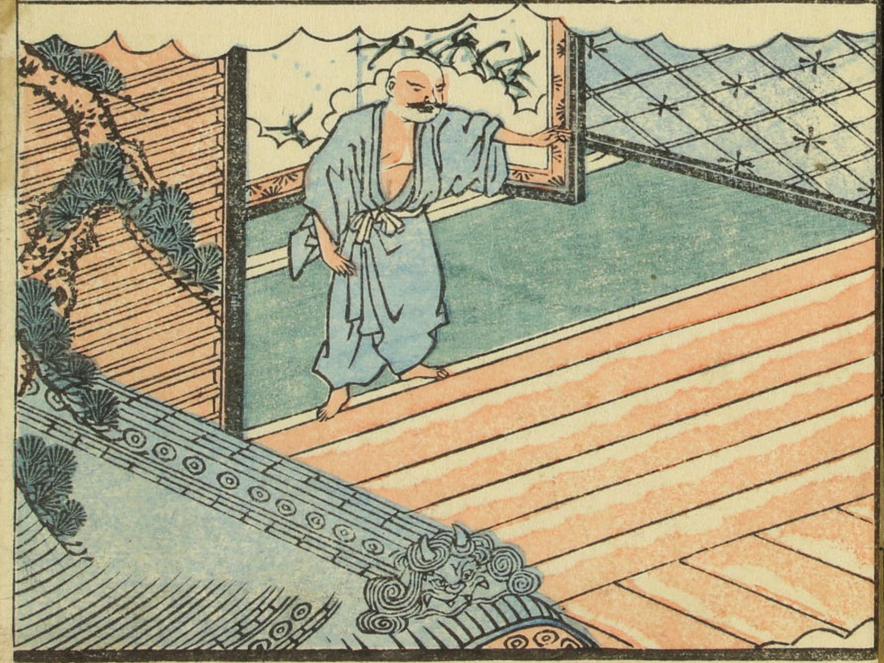
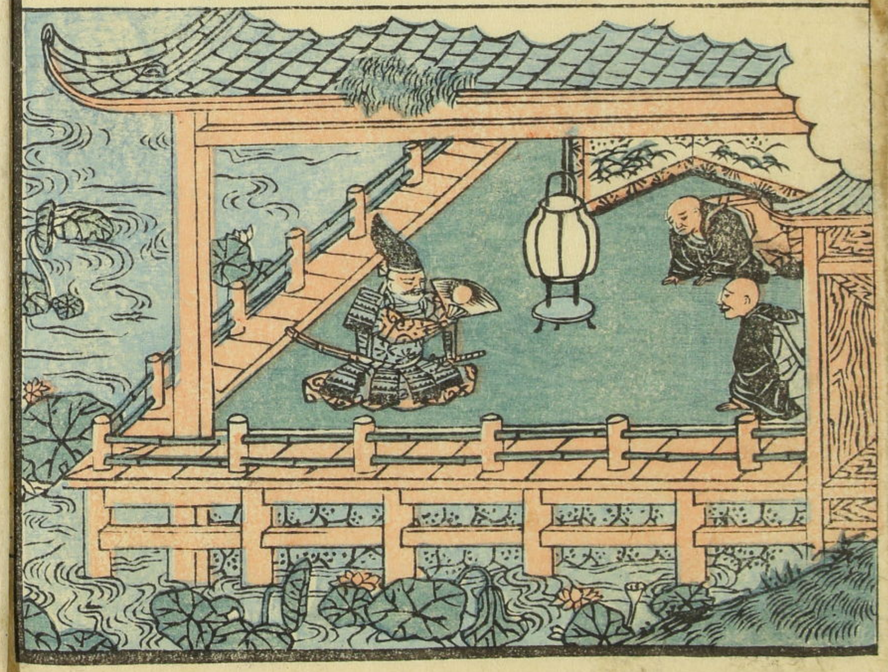
白衣をゆ中〳〵ひ臺所へ出て他ゆ
の傍に来り件ゆ味噌搗居
る傍に居り我ゆ替り搗ま
と板の上に置く味噌ちく搗
り呉ゆ天芸取て三度来きで
剃髮味噌搗居ゆ人非ゆ
ゆのいでちん四月天八秀吉を求
めゆく又門へ出来る此時ゆ清正
八遥ゆ彼の危難を知て宙を飛
て此来り大ち刀引抜躍伏切伏せ
日比の怨年百倍〳〵ゆ十余



人を切伏し此事を紅葉り侍る守よ
我を人の御存知なるやとあらくまバ
四王天も日比虎之介武勇ハ知まろ
此奴討ん〻バ秀吉ハ指しゞ〻と歎き
て惟任謀軍の命を受ける埋伏し
給前守ハ某討ん〻ろ汝も早く刀を
うけ眞逆まて對面せよと雷光のめく
切く魚まバ虎之介も血刀を振て上段
下段切込く〻虎之介ハ身ぶいぎ
組んと両人一度ハ太刀投捨ゆ



組ぐろう双方ゆるゆる大力ハ別兵上よ有り
下ふ有り死力を知し揉合しゞ加番ゞ力
や勝ゆ〻ん絶ふ仆る守を組ゆ脱を打
て縄を魚んと〻四王天下よりゆを
こハ時ゆ清正縄を着して速よ首を
刎よとゆふ虎之介あゞ矣ひおのま我君
を討すゝと某を欺くといへども
匹夫のゆふ安〻と討まゆふ大ゆ〻ゞ
汝を生捕拷問しく君の行ゆを
ぞと是非をいそせゞふ討く縄を
〻ろう四王天再詰くゆる八某今討へ



秀吉を追廻寺中をいろふ捜せども又
よ行ゑ知れざれば我実ふ討ものせんば
首をもらで墨べきや言運の秀吉寺
中よ隠れ居るふよ相違あり〜といへども
凡人の目ふハ勇ゝく見えず我主人光秀
の名謀略よ中〜もといへども かくのごとく
討のしめタ上ハ光秀公の星命も覚束なし
武士の情ハ相互で縄目の恥辱を免早く
首を切ゆへと勇者の一云清心も衣を脱
腰刀引ぬきなんなく首を打落〜
ゝ魏の孫禮よ喩ふ